
風が吹く

笑珈ニコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が吹く

【著者名】

N2232F

【作者名】

笑珈二口

【あらすじ】

「いつから飛んだらなにくれる?」「アイツは、そう言って屋上の柵に手を掛けた。ある時の瞬の出来事。それは僕の長い一瞬だった……。

(前書き)

拙い文章ですが、読んでくださったなら幸いです。

「ここから飛んだら、何てくれる？」

そう言いながら、アイツは屋上の柵に手を掛けた。

やけに水分を含んだ風が、僕の伸び伸びと伸びる髪の毛をさらつて行く。

アイツは無表情に近い顔をして、僕に返事を促した。

「おい、聞ってるか？」

「うん。聞ってるけど。」

「じゃ、どうする？」

「どうするって……。あ、100円あげるよ。」

僕の言葉にアイツは少しだけ表情を緩めた。

何故だか分からぬいけれど、胸騒ぎがする。

静かなのだけれど、どこかで何かが騒ついて耳元が煩い。

なんだ？この嫌な予感は。

「100円って、お前、小学生でも今じゃ言わねえーぞ。」

「……100円以上は出せないよ。僕、今金欠なんだから。」

「嘘だ。この前バイト代入ったばっかだって言つてたじやん」

「やうだよ。嘘だ。」

僕はアイツを見た。

今、僕は焦っているのだろう。

手から汗が滲み出て、さっきから心臓の音が煩い。

そんな、飛び降りる訳無いって。なんて笑っていても、僕はアイツから田を離すことは出来ない。

「なんだよ。んじゃ、何してくれる? 100円以外。」

「コンパでせやるよ。じやなきや、学食のオムライス。」

「リング? オムライス? …… そんだけ?」

「そりゃ、それだけ。だから飛んだって何も面白くない。」

「そりゃ、面白くない。」

何も面白い事なんてない。

僕は拳を握り締める。

長く伸びた爪が手の平に食い込んで痛かった。

アイツは、ふう、と息を吐いて柵から手を離した。

「そりゃ、面白くないか。」

「うん。」

安心、という言葉が浮かび上がり、ホッと胸を撫で下ろした瞬間、僕は息を呑んだ。

アイツが、ひょいと軽々しく柵を飛び越え、向こう側へ着地したの

だ。

「お、おーーー。」

僕は全身で大声を上げた。
まさか、そんなはずない。
こんなの、全然、面白くない。

「何やつてんだよ。冗談は口だけにしてけつて。痛い田遭いつぐ。」

僕は柵に駆け寄って、アイツを睨み付けた。

本当に。

つまらない冗談は止めてほしい。

背中からブワッと変な汗が出た。

熱がおる前の寒気に似た悪寒が走る。

アイツは平然としていた。

そんなアイツを見ていると、僕だけが焦つて、からかわれているだけかもしれない、といつ氣もしてくる。
が、しかし。

きっと、アイツはからかってなんかいないんだ。

「やつぱり、飛んだら、100円でいいや。どうせ……」

僕を見て、アイツは笑う。

「どうせ、飛んだら貰えないしな。」

「何言つてんだよ。馬鹿だな。100円なんてあげないよ。僕、今

お金持つてないし。」

「あはははは。嘘だわ。」

「もうだよ、嘘だわ。」

アイツが前へ踏み出した。

あと一步でアイツは地上へ落ちる。
あと一步で……。

「意味分からぬ。なんのために……100円やるからね、うひち
戻つて来いって。」

アイツが空に向かって手を伸ばした。

僕の言葉は、まるで耳に入つてない。
恐ろしいスピードで動く心臓を、抑えるように息を吐く。
伸ばされた手を眺める。

頭上でそれは、ギュウッと結ばれて、次に▽サインに変わった。

「イヒーイ。俺な、見てほしいんだ。」

その▽サインから目を離せない。
アイツの声が僕の耳に小靈する。

エコーがかかっているように、元気なウワウンウワウンと余韻を残しながら。

「……な、なにを？」

気が付かなかつた。

僕の声は震えている。

僕はアイツから田を離さない。

いや、離せない。

「飛ぶ所をや。」

「シヒ、アイシは白い歯を見せて笑った。

「ジャーン♪……」

アイシが僕に手を振る。
心臓が止まると思った。

「待てよ、待てって。待てたらー!待つてくれよー・っやめろー..
！」

ガシャン、柵に掴み掛かる。
僕は必死に柵をよじ登り、柵の向こう側へ飛び降りた。
ダンッと音をたてながら着地する。
足の裏が痺れていった。

一瞬、世界は時間を無くしたのだと思った。

このまま時が永遠に止まつて、僕らの存在事態、いつかは無くなつてしまつのではないか、と。

馬鹿だ。
馬鹿すぎる。

そんなはずはないのだ。

現に水分の多い、鬱陶しいくらいのこの風は吹き続いている。
時間は確実に過ぎていた。

「…………なにしてんだ……なんだ。なんなんだよー..」

僕は、泣いていた。

叫びたくて、大声で喚いて、誰かを罵りたくて。

誰が悪くて、何が悪くて。

でもアイツは、僕の友達で。

もう、何が何だか分からない。

ただ、僕の見下ろす先には、静かな闇が存在して、それは僕に僅かな圧迫を与えるだけだった。

アイツの母親は、言っていた。

黒い喪服を纏つて涙ながらに、『アイツを殺したのは自分だ』って。

でも、そんな言葉でさえ僕には、薄っぺらく感じられた。

僕にアイツは飛ぶ所を見てほしかったと言った。

それ以外は何も言わずに。

アイツは確かに僕の友達だ。

それだけは変わらずに、時間はこれからも時を刻み続ける。

僕は、あのVサインを思い出して、目を強く瞑つた。

だけど、風は吹いていて、あの時と変わらず、僕の髪の毛をさらつて行くのだった。

(後書き)

なんか無性に書きたくなつて書きました。いまでも読んでください、
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2232f/>

風が吹く

2011年1月18日21時23分発行